

啓蒙思想時代の異国のイメージ

鈴木 球子

要旨

17～18世紀にヨーロッパ諸国は、多くの探検家や宣教師を海外へ送りだした。彼らは南アメリカ大陸内部やアフリカ内地、太平洋の島々へと向かい、調査探検やキリスト教の布教を行った。彼らがもたらした情報をもとに思想家や小説家たちは、異国の地の習慣や習俗について語る。だがそれは多くの場合、限定的な知識に基づく一般化でもあった。

ルソーを初めとする啓蒙思想家たちは、不平等のほとんど存在しない自然状態にある、「善良な未開人」像を思い描いていた。1771年に刊行された、探検家ブーガンヴィルのタヒチ島への航海の記録は、「善良な未開人たち」の居住する地が、海の彼方に実在するという期待をヨーロッパの知識層に抱かせた。彼の航海記は、デイドロなど当時の思想家に大きな影響を与えた。

一方、アフリカやアジアには、ともするとネガティブなイメージが付きまとった。ケンペルが『日本誌』によって伝えたキリスト教徒迫害の描写は、日本人の残酷性をヨーロッパに広く知らしめることになった。モンテスキューやデムニエは、日本のみならずアジアの多くの専制国家の残酷な刑罰に言及する。また、黒人貿易が盛んであったこの頃、アフリカ人はしばしば劣った存在であるとみなされ、その性質も残虐であると見なされた。

これらの異国のイメージは、必ずしも実像を捉えたものではなかった。それは当時のヨーロッパの社会事情や諸思想との対比により生み出されたのであり、「他者という鏡」に映し出されたヨーロッパの逆像をそこに読みとることができる。

キーワード：善良な未開人、啓蒙思想、デムニエ、ブーガンヴィル、デイドロ

1：はじめに

ヨーロッパ列強は大航海時代を経て発見した大陸や島々を、次々と統治下に置いた。15世紀にポルトガルとスペインは相次いで新航路を開拓し、海外領土確保の白熱した競争を繰り広げた。イギリスやフランス、そしてスペインから独立を果たしたオランダは、やや遅れて海外進出を開始したのだが、先行していた二国を次第に凌駕して、植民地を世界各地に広げていった。カトリック教会は、このような動きを積極的に支援し、ローマ教皇はポルトガル・スペイン両国の航海に宣教師を伴わせ、獲得された領土の住民への布教活動を行った。

世界の姿が少しずつ明らかになり始めた近代黎明期には、海外への進出は、冒険航海から地理学者や博物学者を伴った調査航海へと、その性格を少しずつ変えていった。探検家たちは、まだ探索すべき余地が残されている領域に赴き、陸標の命名に加えて、海洋図の作成や土地の測量、生物相の研究などを行った。17～18世紀には、南アメリカ大陸内部やアフリカ内地¹⁾が探索され、また、南方大陸として存在が予言されていた地を目指して、太平洋やオーストラリアの探検も行われた²⁾。このような探索が続けられた背景にはむろん、プランテーションを開発するための植民地を確保する必要性³⁾や、経済市場を広げようとする各国の貿易会社（東インド会社⁴⁾）同士の競争などがあった。

探検家たちは航海ごとに多くの資料を持ちかえり、帰国後には旅行記を上梓する者も少なくなかった。そして、当時の思想家たちは、断片的な情報に基づいて、訪れたことのない地の習俗や風習、人々の性質について語り、限られた知識から解釈や分析を試みて、異国のイメージを描きだそうとした。

2：「善良な未開人」の像

啓蒙時代の代表的な思想家であるルソーが、「善良な未開人 (Bon sauvage)」の像を描き出したことは、よく知られている。彼が1755年に著した『人間不平等起原論』は、人間社会における不平等の起源を探り、文明化以前の「自然状態」や、「自然人」とは何かを論じている。

ルソーの言によれば、かつて人間は不平等のほとんど存在しない自然状態にあったが、文明化という頹落の過程を経て、ついには「徳なき名誉、知恵なき理性、幸福なき快樂」のみを有する存在に墮する。言い換えれば、人間が複雑化した社会関係を築くようになり、富の蓄積・所有権の主張が行われるようになると、人々の間に不平等や争いが生じる。自然状態にとどまれなくなった人間は、各人の身体と財産を保護するような、結びつきを見出す必要性に迫られる。この結びつきこそが「社会契約」であり、社会や国家は、それを構成する個人の自由意志に基づく契約によって成立するのである。

ルソーは、「自然人」として、とりわけ「カライブ人⁵⁾」に言及する。「カライブ人」とは、当時の旅行書がしばしば未開人の典型として取り上げた、西インド諸島に住む人々を指しており、「すべての現存の諸民族のなかで今日まで自然状態をもっともよく保存している民族⁶⁾」と見なされている。

上記の内容はルソーの教育論にも反映されている。『エミール』の冒頭の「万物をつくる者の手をはなれるときすべてはよいものであるが、人間の手につるとすべてが悪くなる⁷⁾」という言葉が示すように、ルソーの教育論は、人間は「善良な (bon)」ものとして生まれるが、社会によって墮落させられるという前提的命題の上に成り立っていた。これは「善良な未開人」と「墮落した文明人」という対立構造と重なりあう。つまり、「自然人」のイメージは、彼の政治論や教育論を補完するのである。

我々はしばしば勘違いをしがちなのだが、未開人を「自然」の代表とし、ヨーロッパ文明の中で失われた善良さを彼らに賦与する考えは、決してルソーをその発案者とするわけではなかった。ルソーが多くの着想を得た、モンテーニュをここで参照してみよう。16世紀ルネサンス期のこの思想家の著『エッセー』には、「人食い人種について」(第1巻第30章)と題された文章が収められており、そこでは「南極フランス」(ブラジルあるいは南アメリカ全般を指す。「西インド」ということもある)に長年住んでいた男の証言を元に、新大陸の住民たちについて論じている。彼らは人間の原初の素朴さと極めて近いところにおいて、未だに自然の法則に従って生きているものとされる。モンテーニュは彼らを「sauvage」と呼ぶが、これは「未開の」という意味だけではなく「野生の」と訳すこともできる。

彼らはとても快適で、穏和な土地に暮しているために、わが証人たちのいうところでは、そこでは病人の姿を見ることさえめったにないという。年老いても、震えたり、目やにが出たり、歯抜けになったり、腰が曲がったりする人間など見たためしがないと、証人たちは断言している⁸⁾。

われわれが実地に、これらの人々のうちに見たものは、黄金時代を美化するために詩で用いられた、あらゆる描写や、幸福な人間の状態を思い描くための、あらゆる着想などを凌駕するばかりか、哲学なるものの観念も願望をもしのいでいるのだ⁹⁾。

モンテーニュは新大陸の暮らしに対して「この完璧さ (cette perfection)」という表現を用いる。こうして彼は、たくましい肉体を備えた人々が、文明社会の習慣・習俗とは縁のない土地で幸せに暮すという、一種の理想郷の世界観を打ち立てるのである。後にルソーも類いの描写を行うのだが、このような未開人の描き方は文明社会への批判を含んでいた。ヨーロッ

パにおいて人々は、「自然で有用な美徳や特性」を己の「墮落した好み」に合わせたのだと語られる。

ここで「人食い (cannibale)」について、一言述べておかななくてはならない。コロンブスは「カライブ人たち」を人食い人種と見なした報告を行っており、16世紀のヨーロッパには、新世界の野蛮人のおぞましい習慣についての認識がすでに存在していた。18世紀のルソーになると、彼はこの風習に言及せず、自然人の性質をひたすら善良なものとして描きだす。トマス・ホップズの説(人間を本来的に邪悪なものとし、自然状態を万人の万人に対する戦いとする)を退けたルソーは、自然状態をもっとも平和なものとして捉えた上で、文明批判を展開する。ところで、ルソーに先立つモンテーニュの説はといえば、未開人は別の部族と激しい戦争を行うとする。勝利を収めた者は敵の首を持ちかえり、住居の入り口に飾る。捕えられた者たちはしばらく生かしておかれる。彼の主人となったものは、やがて知り合いを呼び集め、捕虜を縛りつけ撲殺して、その肉を人々に振る舞う。これは栄養を摂取するためではなく、あくまで復讐のためであると語られる。一体このような行為は、未開人たちの悪意や性質の残虐さを示す例としては捉えられないのだろうか？

モンテーニュは、食人行為をおぞましいものと決めつけてはいない。これは彼が参照したであろうと推測されるジャン・ド・レリー¹⁰⁾の『ブラジル旅行記』を初めとする、それまでの食人への言及とは、一線を画す考え方であった。先立つ諸言説とは異なり、モンテーニュが強調するのは、人食い人種にとって戦いは名誉や勇気の誇示のためにのみ行われるということ、彼らの戦闘における勇敢さ、そして食われる者たちの毅然とした態度などである。言い換えれば、戦闘は物的欲や支配・征服のために行われるのではない。戦士たちは己の勇敢さを戦闘で示し、捕虜もまた降参するよりは食われることを望むのである。モンテーニュは、これらをヨーロッパ人が行ってきた残虐行為と比較する。

わたしが悲しいのは、彼ら〔人食いたち〕のやり方の中に、おそろしいほどの野蛮さが存在することを、こちらが見てとるからというわけではない。われわれが、彼らのあやまちを正しく判断しながら、われわれ自身のあやまちについては、これほどまでに盲目であることが悲しいのだ¹¹⁾。

この〔野蛮な行為〕を、われわれは書物で読んでいるだけではなく、この目で見て、なまなましく記憶にとどめている—それも、年来の仇敵どうしのできごとなどではなくて、隣人や同じ町の住人どうしで、しかももっと悪いことに、信仰と宗教に名を借りておこなわれている¹²⁾。

この「信仰と宗教に名を借りて (sous prétexte de piété et de religion)」という表現は、意味深長である。というのも、当時のヨーロッパは宗教戦争の真っ最中であった。『エッセー』が出版されたのは1580年であるが、そのわずか8年前にパリでは「サン・バルテルミの大虐殺」と呼ばれる事件が勃発していたのだ。カトリック教会とユグノーの対立、そしてそれに絡む貴族の政治闘争が引き起こした混乱は、この事件で頂点に達した。パリでは約4000人が殺害され、さらに虐殺はさらにフランス全土に及んだ。モンテーニュは食人を野蛮だとする認識に疑義を抱くばかりでなく、見方によっては肯定的に解釈することも可能であることを示し、一方では、非難の矛先を再びヨーロッパへと振り向けてしまうのである¹³⁾。新大陸の習俗についての考察は、結局のところ、己の属する社会の再考に繋がるものであった。

文明化以前の自然状態に暮す「善良な未開人」のモデルとなるのは、原罪以前のエデンの園である。「宣教師や探検家たちは、原罪前のこのような人間とともに暮らし、彼を詳細に研究し、曰くヨーロッパの墮落したキリスト教徒たちに欠落しているキリスト教的美徳のすべてによって飾られている姿を想像する¹⁴⁾」と、アンドレ・デラポルトは述べる。重要なのは、聖書の文脈において「未開人」を語ることであり、生きた聖遺物を異国の地に見出すことなのだ。彼らが暮す理想郷については、18世紀に頻繁に語られていた。「地上の楽園¹⁵⁾、アルカディア、エルドラドの諸テーマがこうして示される。18世紀はこのテーマを大量消費した¹⁶⁾。」幸福と平和に満ちたかつての黄金時代の再現、もしくは地上の楽園が存在する地としてもっとも期待されたのは、南アメリカ大陸とオセアニア（特にタヒチ）であった。「宣教師たちや探検家たちの熱狂的な話のお陰で、18世紀は幸福の島がアトランティスやトゥーレ¹⁷⁾、イス¹⁸⁾もしくはヴィネタ¹⁹⁾のように、海に呑み込まれてしまったのではないことを知った。それは実際にアメリカやオセアニアに存在していたのだ²⁰⁾。」理想郷や黄金郷は、頻繁に小説の題材ともなった。例えば、ルソーと並んで啓蒙時代の思想家の代表とされるヴォルテールは、『カンディードまたは最善説』で主人公を新大陸へと向かわせている。無邪気なカンディードは、師パングロスの教え通りに、この世のすべては必然的に最善の目的のために存在すると信じている。しかし、この「最善説」に従って行動することは、常に彼を不運へ導く。ヨーロッパをさすらう間に、様々な事件に巻き込まれたカンディードは、ついに海を越えて新世界、つまり南アメリカ大陸へと向かう。「ぼくたちは別世界へ行こうとしているのです」「その世界では必ずすべてが善です²¹⁾」と主人公は期待する。新大陸でカンディードと彼の従僕が辿りついた地は、街道に黄金や宝石が転がっている、まさに黄金郷である。そこには法廷も牢獄も存在せず、すべての人間は善良である。宗教的指導者がいなくとも、彼らは疑うことなく神をあがめる。そして国王は才気あふれる人物であり、主人公にこの上ない好意を示す。ところが、カンディードはエルドラドを彼の祖国より素晴らしい国だとは認めながらも、黄金を持ってヨーロッパに帰還し、生き別れた恋人を探しだすことしか考えてはいない。

1771年に刊行された、フランス海軍大佐ルイ・アントワヌ・ブーガンヴィルの航海の記録『1766年、1767年、1768年、1769年に国王の巡洋船ブードゥーズ号と輸送艦エトワール号によって行われた世界周航記』は、所有の観念に未だ毒されないまま、自然状態の中で生きる「善良な未開人」が居住する地が、海の彼方に実在するという期待をヨーロッパの知識層に抱かせ、大きな反響を呼んだ。

ブーガンヴィルは博物学者やデッサン画家、天文学者らを伴って、フランス初の世界周航を目指して、1766年11月5日にナントの港をブードゥーズ号で出発した。同艦はリオ・デ・ジャネイロ港でエトワール号と合流し、マゼラン海峡を経て太平洋へと向かった。翌年4月に一行はタヒチ島に到着し、そこに10日間滞在したのちに、帰路についた。インド洋、モーリシャス島（ここでエトワール号と別れた）、そして喜望峰を回って、1769年3月16日にフランス、ブルターニュのサン・マロ港に帰着した。航海期間は2年4カ月に及んだ。ブーガンヴィルは好奇心旺盛なタヒチ人、アオトゥールをバりに連れ帰り、社交界に大変な騒ぎを引き起こした。「彼〔アオトゥール〕を見ようと、人々が押し掛けるのは大変なものだった²²⁾」と、『世界周航記』にはやや苦々しげに記されている。

ブーガンヴィルはタヒチ島に到着した当初、島民たちのうらやむべき幸福状態、とりわけ不平等のない暮らしに感銘を受ける。彼は島の自然の美しさを「エデンの園 (le jardin d'Éden)²³⁾」という言葉で表現するが、それは島の生活、風習等を含めた全体的な印象にも当てはまる。タヒチ人たちはめったに病気をせず、健康で体力があり、姿形は均衡が取れていて美しいとされる。だが、「ヘラクレスやマルスを描くのに、これほど見事なモデルは、どこにも見つかるまい」「彼らの顔立ちはヨーロッパ人と少しも違いがない」「もし彼らが衣服を身につけ、これほどが生きや太陽にさらされることなく暮したならば、我々と同じくらい白いであろう²⁴⁾」と書かれているように、ブーガンヴィルの美しさの基準とは、ヨーロッパ人に似ていることであり、究極的にはギリシャ美術的肉体美を指す。言い換えれば、彼はヨーロッパ的価値観の色眼鏡をかけて、美醜を判断するのだ。アオトゥールは、背が低く、ムラート（白人と黒人の混血者）に似た肌と顔立ちを有していて、さほど美しくないと言われるが、それは彼が首長と別の島の住民（女捕虜）との息子であることによる。だが、容姿は劣っても、彼は高い知性を所有していると語られる。島民たちの性格は温和で親切であり、ブーガンヴィルは「善良な」という形容詞を用いて、それを表現しようとする。彼らは小さな盗みを働いて、航海者たちを悩ませはしたが、基本的にはヨーロッパ人たちを非常に友好的に迎え入れた。「毎日、我が部下たちは、この国を、武器を持たずに、一人であるいは少人数で歩きまわっていた。彼らは家々に入るよう招かれ、食べるものを供された²⁵⁾。」「いたる所で、我々は歓待、安息、穏やかな喜び、そして幸福を眼に見える形で表すすべてのものを見出すのだった²⁶⁾。」

ブーガンヴィルはしかし、アオトゥールと会話を重ねるうちに、タヒチ（という幸せな島）についてのこれらの第一印象を改めなければならないことに気付く。

私は、先に、タヒチ島の住人が、我々には、うらやむに価する幸福のうちに生きているように見えると言った。我々は、彼らが、彼らの間でほとんど平等であり、あるいは少なくとも全員の幸福のために作られた掟にしか従わない自由を享受しているものと信じた。私は間違っていた。タヒチでは身分の区別は大変顕著で、不平等はたいへん厳しいものである²⁷⁾（傍点は引用者による）。

ブーガンヴィルが気付いた、不平等な風習の例を挙げてみよう。王や有力者たちは、彼らの奴隷と使用人に対して、生殺与奪の権利を持っている。「タタ＝エヌ」と呼ばれる被差別民に対しても同権利は有効であると信じられ、さらにこの不幸な階級は生贄に捧げられる者たちでもある。肉と魚を食べられるのは有力者たちのみであり、庶民は野菜と果物だけで生きなければならない。その他にも、灯りの点け方に至るまで、あらゆるところに階級別区分が見られる。タヒチには「不平等が存在しない自然状態」が今なお存在しているという幻想は、こうして矛盾に突き当たる。

先述したように『世界周航記』がヨーロッパの知識層に与えた影響は大きかった。百科全書派のデイドロは1772年に、架空の登場人物による対話体小説『ブーガンヴィル世界周航記補遺』を著した。これは実際の『世界周航記』の最後に、本文のタヒチ紀行の章から削除された部分が『補遺』として付載されていたという体で書かれたもので、『文学書簡』に、『これは作り話ではない』『ラ・カルリエール夫人』という他二作品と共に、三部作の一つとして掲載された²⁸⁾。

『ブーガンヴィル世界周航記補遺』の第一章は、AとBという二人の人物の対話を取り上げる。彼らはブーガンヴィルその人の紹介や、『世界周航記』がヨーロッパにもたらした利点や新たな認識、様々な影響や文体などを検討した後に、タヒチ人とヨーロッパ人の差異の大きさを確認しあう。そして第一章の最後では、BからAに向かって『世界周航記』を一緒に読もうという提案がなされる。続く各章の終わりには、その内容について、この二人による感想が付されている。

第二章では、タヒチが舞台となり、ブーガンヴィル率いる艦隊が島から立ち去る際に、長老が叫ぶ嘆きと呪詛の言葉が紹介される。それは、ヨーロッパ人たちがこの島に持ち込んだ様々な悪—私的所有の意識、性に関するタブーの認識と羞恥心、罪悪感の移入など—に対する糾弾であり、怒りの声である。

第三章と第四章は、周航隊に加わっていた若いカトリック司祭と、タヒチ人オルー（アオ

ツールをモデルにしたものと推測される)との対話である。司祭は夜毎にオルーの三人の娘と彼の妻から性的歓待を申し出られ、聖職者という身分に対して苦悩しつつも、ついには快楽の誘いに負ける。この出来事を巡ってオルーは、司祭が従う宗教的・社会的規範に疑問を抱き、二人は意見をぶつけ合う。そして第五章は、再びAとBの対話によって締めくくられる。

この書物には「道徳的観念と無関係なある種の身体的行為にこの観念を結びつける弊害についてのAとBの対話」という副題が付されている。そして、これまでに多くの論者によって、デイドロは「善良な未開人」であるタヒチ人の生活と比較することで、ヨーロッパ文明の害悪を暴き、告発しようとしたのだと説かれてきた。しかし、我々はこの見方だけに集約できない複雑さを、彼のテキストに読みとることができる。例えば、第二章の終わりで、AとBは長老の悲哀に満ちた別れの演説を検討する。Aは、「野生的な言葉をつらぬいて、ヨーロッパ的な考えや表現が認められるような気がする²⁹⁾」という疑問を抱く。これに対してBは、老人の語るタヒチ語をあらかじめオルーがスペイン語で書きとめ、ブーガンヴィルはその写しを入手してフランス語に直したからであろうと説明をする。オルーは長老によって、「この者たちの言葉が分かるお前³⁰⁾」と呼ばれている。これらのことは、オルーがすでにスペイン語、つまりヨーロッパの言語を習得している人物であり、ヨーロッパ的な論理を理解し、駆使できることを示している。タヒチの長老は、演説の終わりに海に向かって呼びかける。「お前が航海していた時、お前を見逃した罪ある海が、罪を償い、お前が帰国する前に呑みこんで、我々の敵を打ってくれるように³¹⁾。」タヒチ人たちはヨーロッパの文化を既に受け入れてしまっている。侵入者たちを打ち滅ぼせるのは、島を取り巻く自然の荒々しさ(暴力性)でしかない。

ミシェル・ドゥロンが『ブーガンヴィル世界周航記補遺』を含む三部作を、「三つの物語は、性的モラルと関わっている³²⁾」と指摘したように、登場人物たちは性と道徳の問題をめぐる、もっとも熱心に議論する。ブーガンヴィルはタヒチの習慣として、客人に食事ばかりではなく、若い娘をも提供すると述べているが、デイドロもそれを踏まえている。ブーガンヴィルは「この地の習慣に従った者は〔乗組員の中に〕誰もいなかったとは保証しない³³⁾」と告げ、彼らとともに快楽を味わった者たちがいることをほめめかす。理想郷は、性的天国、つまりハレムの様相をも持ちうるのだ。タヒチでは一夫多妻が一般的であり、妻は夫に服従しなくてはならない。ヨーロッパ的な貞操観念は存在せず、夫さえ同意すれば妻は他の男と臥所を共にできるし、結婚前の娘であれば、何の遠慮もいらず複数の愛人を持つことができると述べられる。

『ブーガンヴィル世界周航記補遺』では、オルーは司祭に対して神の世界創造という教えを否定し、さらにキリスト教が強制する性的禁忌(不貞行為、近親相姦など)には根拠がな

いことを順次明らかにしていく。具体的にいえば、司祭が己の宗教の導くところに従って、他人の妻や娘と一夜を共にすることを拒む理由を、オルーは全く理解できない。司祭が最終的には性の欲望に屈することが、この理解不能さに一層拍車をかけることになる。司祭は神や法、結婚という掟などを持ち出して説得しようとするが、これらにもオルーは疑いの目をむける。そもそも、あらゆる時代と場所を通じて共通の掟、つまり自然の永遠の意志とは、「幸福は不幸より好まれるべきだし、世界全体の利益が個人の利益に優先すべきだ³⁴⁾」ということではないのか、とオルーは問いかける。

「世界全体の利益が個人の利益に優先すべき」という考えは、ルソーを初めとする啓蒙思想家たちの言説と明らかに呼応する。ルソーは『社会契約論』において、「特殊意志（個人の意志）」、「全体意志（特殊意志の総和）」そして「一般意志（つねに正しく、公の利益を目指す）」の概念を明らかにした上で、「一般意志」への各人の服従を説いたのだった³⁵⁾。かくして、人間社会が成立する以前の自然状態が保たれていると思われていた、タヒチ島の住人が、突如としてヨーロッパ的近代思想を語りだすという珍事が起こるのである。

ヨーロッパ的な性的禁忌や貞操観念、羞恥心などが存在しないように思えるタヒチにも、実は「道楽者」あるいは「ふしだら女」と呼ばれる人々が存在している。しかしそれは文明国の場合と違って、生殖能力をすでに失った女性と交渉を持つ男性、妊娠しない時期に相手を求める女性を指している。また、まだ身体が十分に育っていない若者たちも、性行為から遠ざけられている。違反行為には、とりたてて厳しい罰則は課されないが、叱責の対象となる。一方、妊娠適齢期であるにも関わらず、子供のいない女性は、両親の嘆きの種である。中川久定はこれらの認識に対して、「タヒチ島においてはすでに、基本的な社会規範、道徳的善悪の観念が成立している³⁶⁾」と指摘する。性的営みは一見自由であるように見えながら実は制限が設けられ、快樂のためではなく、子孫を生みだすという目的を持つ行為なのである。そして、人口の増殖は、めいめいの財産と社会全体の財産の増加という考えと結びつく。

オルーはさらに衝撃的な事実を明らかにする。ヨーロッパ人たちが受けた性的虐待は、実はタヒチ島人たちのためであったというのだ。「俺たちの妻や娘は、お前の血管から血を絞り出してやったのさ。お前が島から出ていく時、お前のつくった子供が俺たちのところに残るのだ³⁷⁾。」残された子供たちは、広大な未耕作地を耕す人手となる。あるいは、島人たちの間に生まれた子供よりもできが悪ければ、隣国への奴隷として差し出される。すべては計算ずくであったのだ。そして、ここで忘れてはいけないのは、『百科全書』の中でディドロが自ら執筆した項目「人間 (homme)」において、「人間と土地のみが、真の資源である（傍点は引用者による）」「人間は数によって価値を持つ。人口が多ければ多いほど、平和な間の社会は強力であり、戦時中は恐るべきものになる。したがって、君主は臣民の数を増やすことに、真剣に取り組むであろう³⁸⁾」と記されていることである³⁹⁾。このように、性行為は純

粹に感覚的なものでも、身体的なものでもなく、社会的意味あるいは政治的意味を与えられてしまうのだ。

『ブーガンヴィル世界周航記補遺』は架空の物語であるとはいえ、当時の思想や世界観と密接に絡む複雑な問題を抱え込んでいる。長老は、ヨーロッパ人たちが訪れる前の平和な状態を懐かしんでいる。そこでは全てが共有され、人々は健康で、自然の欲求に従って生きていた。ヨーロッパ文明の墮落した習慣、つまり私的所有の観念や性に対する罪の意識などを、ブーガンヴィルらが持ちこんだとして、長老は怒りを表す。ここでデイドロは、ルソーの言説をなぞっているかのように思われる。だが、ブーガンヴィルが来る前に、島にはヨーロッパの言語が持ち込まれていることもほめかされる。単純に自然の欲求に従うものであったはずの恋愛は、島全体の利益になるかどうかという物差しで測られる。すでにここには、社会を維持・拡大するための労働力確保という、近代的テーゼが現れている。言い換えれば、まったく純朴な野生生活の描写（それもまた、啓蒙主義的テーゼを補完するイメージにすぎないのだが）は、ところどころにおいて崩れている。結局のところ、『ブーガンヴィル世界周航記補遺』があぶり出す問題は、タヒチの実像ではなく、ヨーロッパ社会の様々な側面の反映なのだ。

3：残酷なアジアとアフリカ

南アメリカ大陸の国々やタヒチが理想郷として描かれる一方で、アジアやアフリカには一前者はその専制によって、後者はその後進性によって一否定的なイメージがしばしば押し付けられた。

エンゲルベルト・ケンペルの『日本誌』は、アジアの専制的な一国家である「日本」に対するイメージを広める大きな要因となった。オランダ東インド会社勤務のドイツ人船医であったケンペルは、オランダ領東インドのバタヴィア（ジャカルタ）へ渡り、その後シャム（タイ）を經由して、1690年に鎖国中の日本を訪れた。そして、オランダ商館付きの医師として、約2年間出島に滞在した。日本に滞在中、彼は精力的に資料を収集した。『日本誌（*The History of Japan*）』は彼の死後、1727年にロンドンで出版され、フランス語、オランダ語にも訳された。『百科全書』の「日本」の項目の大部分は、この書のフランス語版（*Histoire naturelle, civile, et ecclesiastique de l'empire du Japon*）を典拠として書かれている。

『日本誌』には、歴代将軍治下でのキリスト教迫害について記載されている。第4巻の3章「長崎の町内番所および住民ならびに長崎周辺の行政」には、長崎における新年の踏み絵の様子が描かれている。「イエズス会士たちの手紙によると、1590年だけでもキリスト教のために、20,570人が殺された（略）⁴⁰⁾。」さらに、江戸幕府が布教を禁じただけでなく、聖職

者に対して国外撤去を命じたにも関わらず、ポルトガルやスペインの教会が神父を送りこみ続けたことに触れる。「キリスト教徒に対する迫害は、歴史上例を見ないものである。丸々40年続く、福音の聴衆たちの残酷な大量殺りくの後、それはキリスト教の根絶によって幕を閉じる⁴¹⁾。」こうして、日本人の性質は極めて残酷なものであるという認識が、思想家たちの間に広まった。

ケンペルの愛読者のうち、モンテスキューとジャン・ニコラ・デムニエに注目してみよう。モンテスキューは『法の精神』(1748)において、共和政、君主制、専制政という三つの政体を論じている。「共和政体の本性は、人民もしくはあるいくつかの家族が最高の権利をもつということ、君主政体の本性は、君公がそこでは最高権力をもつが、制定された法律に従ってそれを行行使すること、専制政体の本性は、ただ一人がその意思と気紛れによって統治するということであった⁴²⁾。」各政体を支える基本原理として、共和政は「徳」、君主国は「名誉」、そして専制政体の国は「恐怖」に立脚する。そして、とりわけ日本はこの「恐怖の原理」を極限まで推し進めたのだとされる。

度のすぎた刑罰は専制政治自体を腐敗させることがありうる。眼を日本に向けてみよう。そこでは、ほとんどすべての罪は死をもって罰せられる。なぜなら、日本の皇帝ほど偉大な皇帝に服従しないことは、大変な罪であるから。罪人を矯正することではなく、君公の報復をすることが問題なのである⁴³⁾。

モンテスキューは上記の文に「ケンペルを見よ⁴⁴⁾」と注を附しており、当時の日本についての観念は大いにケンペルに拠るものであったことを示している。日本の専制政治において、法律は罪人を矯正させるという性格を失い、刑罰は皇帝の利益に反することへの(死を以てしての)仕置きとなる。人民の性格は「頑固で、気まぐれで、決然としていて風変わりで、どんな危険や不幸にも毅然と立ち向かう⁴⁵⁾」とされ、それゆえに立法者が残虐な法律を作ったのも、「一見したところ (à la première vue)」許せるようだと述べられる。だが、生まれ付き死を軽視し、気まぐれから腹を切るような人々は、刑を見せつけられても行動を改めるとは思われない。刑罰の度合いは果てしなくつりあげられ、人々を怯えさせる。そして、「刑罰が度を越しているとき、人は罰しないでおく方をしばしば選ばざるをえない⁴⁶⁾。」こうして、法律の残虐性は、法の無力さに繋がるのである。

モンテスキューは「それ〔日本の法律〕はキリスト教を壊滅させることに成功した⁴⁷⁾」ことにも触れているが、それは専制主義の残酷さを示す一例として挙げられるのにすぎない。そして日本人の残酷さを証明するために、その他にも『東インド会社旅行関係記録集』から、日本で起きた様々な残酷な事件—さらわれて布袋に入れられる少年少女、泥棒、馬の腹を裂

く行為、大奥の女性たちが行った子殺しなどが抜き書きされる。

デムニエは『諸民族の習慣と風習の精神』（1776）において、様々な土地での人間の活動をテーマ毎に羅列する。彼もまた、17世紀の初めに日本で起きた、キリスト教迫害に言及した。「専制の国々の臣民たちは、奴隷でしかない。人々は彼らの命は気にも留めず、恐怖によってのみ抑えつけ、自然に背く処罰を考案する⁴⁸⁾」と記されたのち、中国の笞刑の描写に続いて、『東インド会社旅行関係記録集』を引用して、日本の切支丹に加えられたおぞましい行為が語られる。専制君主は奴隷である人々の身体の一部を自由にするため、処罰は苦痛を与えるものだけではなく、性的なものとしても描かれる。モンテスキューは共和政における女性の自由と、アジアの専制国家における女性の隷属を対比的に描き出した。デムニエにおいては、女性の扱いの記述はもはや荒唐無稽なものとなり（あるいは想像の産物とでもいおうか）、専制国の残忍さとみだらさが際立たせられている。「若い女性たちは公の広場で裸にされ、獣のように歩くことを強いられた⁴⁹⁾。」

『諸民族の習慣と風習の精神』の第15章第1節は、再び各国の刑罰の紹介に充てられている。諸刑罰は、未開人（Sauvage）、半野蛮（demi-barbare）な人々、文明化された（policé）人々、そして啓蒙された（éclairé）人々の4つの場合に分類される。そこでは、未開であるほど、残酷な刑罰を課すものとされ、反対に啓蒙された人々は、（状況に応じてぞっとするものになることもあるが）刑罰を穏やかなものにする述べられる。とはいえ、挙げられている事例は、この序列に必ずしも従っているわけではなく、情報はひたすら羅列される。章の後半では、イギリスの刑法が残酷であり、日本人と比較しうることが書かれたあと、東洋の専制について触れている。「東洋では、そして専制の国々では、法によって定められた刑罰はすさまじいものである⁵⁰⁾。」例として挙げられるのは、「アジアの小さな国々」であり、具体的にはシャム（タイ）、朝鮮、中国、日本（「日本」についての記述は、またしてもケンペルが出典だとされる）を指す。デムニエにおいて、「東洋と専制という二つのカテゴリーは混同されてはいないが、重なり合っている⁵¹⁾」と、ドゥロンは指摘する。アジアの処罰の残酷さは、専制国家の下にある人間の性質を、直接的に反映するものと見なされるのだ。

デムニエはジャン＝バティスト・ラバを引用し、イギリス人が植民地において、彼らの土地に侵入した黒人やインディアンたちを体刑によって罰する様子を記している。しかしそれ以外は、ヨーロッパ人の奴隷に対する態度を、掘り下げようとはしない。植民地の支配者たちの実情は、デムニエの文章には反映されていない。一方で黒人やインディアンたちは「未開人」に分類され、その残酷さが執拗に描かれる。「未開人たちの刑罰には、遅鈍で冷淡な残酷さを見出せる。もしくは彼らの性格にも似た粗野な無情さだ⁵²⁾。」ここでも、刑罰の性質は、それを行う者たちの性格を表すものであると考えられている。そして驚くべきことに、黒人たちの残酷さを引き合いに出すことは、黒人貿易の正当化に繋がるのである。「黒人貿

易の確立は、海辺の黒人たちの刑罰を和らげた。人々は大多数の罪人たちを売りとはすが、かつては殺していたのだ⁵³⁾。ヴェルデ岬の人々は何人もの犯罪者をおぼれさせ、ジュイダ王国⁵⁴⁾では殺人者の腹をえぐるとされる。こうして、アフリカ居住民たちの残酷な身体刑が続けざまに披露される。

17～18世紀は大西洋黒人貿易の最盛期であった。この時期、イギリスを初めとするヨーロッパでは茶やコーヒーを飲む風習が広まり、砂糖の需要が急激に高まった。そのため、ヨーロッパとアフリカ、アメリカ大陸を結んで、砂糖生産のプランテーションに労働力を送り、植民地からヨーロッパへ砂糖を運ぶという、いわゆる「三角貿易」の形が確立した。奴隷の一部はアメリカ南部に送られ、綿花のプランテーションで労働を強いられた。このような状況にあって、「生来の奴隷」としてのアフリカ人像は当然のことに語られ、それは生物（人種）分類の体系にまで影響を及ぼした。例えば、近代植物学・博物学の先駆者カール・リンネ⁵⁵⁾は『自然の体系』第10版（1758）の中で、人間に「ホモ・サピエンス」という学名を与え、その六種類の亜種（変異）を記載している。アメリカ人、ヨーロッパ人、アジア人、アフリカ人、そして「未開人⁵⁶⁾」と「奇形人」である。ヨーロッパ人は「移り気で、利発で、創意に富む」「法によって統治される⁵⁷⁾」とされるのに対し、アフリカ人は「ずる賢く、なまけもので、怠慢」であり、「主人たちの恣意によって支配される⁵⁸⁾」とされる。つまり、分類学が黒人生来の性質を保証し、彼らの奴隷状態を当然のものとするのである。

18世紀中頃になると、奴隷貿易と奴隷制度に対する批判的な論調も現れてくる。モンテスキューは『法の精神』の中で、「黒人の奴隷制について」と題された一章を著している。

もし、私が、黒人を奴隷とすることについてわれわれがもっていた権利を擁護しなければならなかったら、わたしは次のように述べることになるだろう。（略）砂糖を産する植物を奴隷に栽培させるのでなかったら、砂糖はあまりにも高価なものとなるであろう。現に問題となっている連中は、足の先から頭まで真黒である。そして、彼らは、同情してやるのもほとんど不可能なほどペしゃんこの鼻の持主である⁵⁹⁾。

この箇所は注意して読まなければならない。というのも、冒頭の「もし、私が、黒人を奴隷とすることについてわれわれがもっていた権利を擁護しなければならなかったら、わたしは次のように述べることになるだろう（Si j'avais à soutenir le droit que nous avons eu de rendre les negres esclaves, voici ce que je dirais.）」は、事実に反する仮定に基づく推論を表す条件法で書かれているからである。モンテスキューは、自分にその意図はないのだが仮に奴隷貿易を擁護するとすれば、として語っているのだ。とはいえ、彼が積極的に、全面的な奴隷廃止を主張したとまでは言い切れない。彼はいくつかの国々（専制政体をもつ国など）にお

いては、穏和な奴隷制に関する権利の正しい、理性にかなった起源が存在すると述べる。だが、残酷な奴隷制に対しては、「すべての人間は平等に生れついているのだから、ある国々においてそれがどんな自然的理由に基づいているとされようとも、奴隷制なるものは自然に反していると言わなくてはならない⁶⁰⁾」と宣言するのである。

モンテスキューの言葉から、我々は二つのことを読みとることができる。第一に、彼が背理的に語る奴隷制擁護論から、当時の奴隷制支持者たちの言説や、アフリカ人に対する認識がいかなるものであったかを知ることができるのだ。奴隷の存在は、砂糖を安価に生産するために当然必要であるとされる。肌の黒さはそれだけで、善良さの欠如の根拠となり、また、金よりガラスの首飾りを好むことから、「文明化された諸国民」と同じ価値観を持たないという理由で、黒人の非常識さが語られる。そして黒人の外見に対する「ペしゃんこの鼻」という侮蔑を込めた言い方は、リンネの「とても黒く縮れた髪、ピロウドのような肌、平たい鼻」という、黒人の容姿描写と重なり合う。第二には、モンテスキューは生来の奴隷たるアフリカ人像には否定するものの、その実像にはほとんど触れていないということである。彼は奴隷制に反対の声を上げるが、アフリカ人の生身の姿に興味を抱いたわけではなく、それはあくまで己の説く人間平等論の一部として主張されるものなのである⁶¹⁾。

4：まとめ

本論文では、18世紀の様々な文書から、ヨーロッパ以外の諸地域がどのように描かれてきたのかを検討してきた。思想家たちは世界各地の制度や風習、人々の性質について論議し、小説家たちは異国を舞台とする物語を著した。だが多くの場合それらは、多様な現実をそぎ落とされた描写であった。むろん書き手によって差異は存在する⁶²⁾が、そこにはあるイメージがおぼろげに浮かび上がる。

大航海時代には、未知の土地に居住するものは驚異（憧憬と嫌悪）の対象であった。しかし近代になるにつれて、彼らはヨーロッパの思想の中に組み込まれ、「他者」として位置づけられるようになる。彼らはある時は「退廃したヨーロッパ文明」に対比されるべき「善良な未開人」であり、またある時は近代政治論において批判されるべき「専制」の実態を証明する「残酷な東洋人」であり、そして「生来の奴隷」かつ「野蛮な」アフリカ人なのである。異国性は、神秘性や生殖力、野蛮さや深淵さなどと符合をみせる。分類学者や哲学者たちはおそらく他者を外在的に、あるいは客観的に観察し、理性的に分類や表象を行っていると思っていたのかもしれない。我々はここでエドワード・サイードの言葉を思い出す。「事物の中には、精神によって弁別され、客観的に存在しているように見えながら、実は虚構上の実在性しか有していないものがある。(略) 数エーカーの土地に住む一群の人々は、自分の土地や

その周囲と、その向こう側の領域とのあいだに境界線を設け、向こう側の土地を『野蛮人の土地』と呼ぶ⁶³⁾。異国のヴィジョンは「他者という鏡」に映し出されたヨーロッパの逆像であり、それを描きだす者たちの制度や言説に依拠し、首尾一貫性を補完するものとなるのだ。だが、それらの言説は時に—ブーガンヴィルやディドロにおいて—綻びを見せるのである。

注

- 1) ヨーロッパ人がアフリカ内地にコロニーを築いたのは、ケープなどの例外を除いてずっと後のことであった。Cf. 宮本正興・松田素二『新書アフリカ史』、講談社現代新書、1997年。
- 2) オランダ人アベル・タスマン—タスマニア島は、発見者である彼の名にちなんでいる—は、1642年と1644年に、オランダ東インド会社の元で2回の航海を行った。この1回目の航海は、既に発見されていたオーストラリアの西海岸が、「テラ・アウストラリス」と呼ばれる仮説上の大陸であるかを調べるために依頼された。タスマンは、第2回目航海でもやはり、調査のためにニューギニアやオーストラリア辺りを周っている。1769年に、イギリス人探検家のジェームズ・クック（通称キャプテン・クック）も「テラ・アウストラリス」の探索を王立協会から求められ、タヒチからニューギランド付近を航海した。
- 3) クックが海洋探検家としての技量を認められたのは、七年戦争に伴って起きた、北アメリカ大陸の英仏間の植民地戦争においてであった。クックはセントローレンス川の河口域を綿密に測量し、海図を作成した。この海図が、イギリスのケベック上陸作戦を成功に導いたと言われており、地形調査と植民地を巡る抗争とは、密接に関連するものであった。
- 4) 重商主義政策のもとで、経済に大きな影響をもたらした、貿易独占権を与えられた勅許会社。オランダ（1602年）を初めとして、各国ごとに設立された。単なる商事会社ではなく、条約の締結や軍隊の交戦も権利として有しており、行政機構としての性格も帯びていた。イギリス東インド会社とフランス東インド会社は、インドの覇権を巡って激しい抗争を繰り広げた。
- 5) 「カライブ (Caraïbe)」は「カリブ海地域の原住民」を指す。
- 6) ROUSSEAU Jean-Jacques, *Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les hommes*, Gallimard, 2006, p.61. ルソー『人間不平等起原論』、本田喜代治・平岡昇訳、岩波文庫、1933年、78頁。
- 7) ROUSSEAU Jean-Jacques, *Émile ou De l'éducation*, G.F Flammarion, 2009, p.45. ルソー『エミール (上)』今野一雄訳、岩波書店、1962年、p.23
- 8) Montaigne Michel Eyquem de, *Essais* (1580), Chez Firmin Didot Frère, 1836, p.97.
- 9) *Idem*.
- 10) 1555年から60年にかけてのフランスのブラジル植民地化計画に際して、ジュネーヴ協会が送った派遣団の一員として、ブラジルに渡った人物。現地監督と折が合わず、一時は植民地から離れ、グアナバラ湾周辺に居住していたトゥピナンバ族と共同生活を送った。『ブラジル旅行記』は彼の実体験に基づいて書かれたものと言われる。レリーはトゥピナンバの食人習慣には、嫌悪感を示している。
- 11) Montaigne Michel Eyquem de, *Essais*, op. cit., p.112.
- 12) *Idem*.
- 13) レリーも、ヨーロッパでは食人行為よりも残虐なことが行われていると指摘している。
- 14) André Delaporte, *L'idée d'égalité en France au XVIIIe siècle*, Presses Universitaires de France, 1987, p.58.
- 15) 「Paradis terrestre」の訳語。「エデンの園」の意でもある。
- 16) André Delaporte, *L'idée d'égalité en France au XVIIIe siècle*, op. cit., p.57.

- 17) 古代ヨーロッパから、アイスランドやグリーンランドに位置すると考えられてきた伝説の島。
- 18) フランス・ブルターニュ地方に伝わる伝説の都市。大洪水によって一夜のうちに姿を消したと言われている。
- 19) ドイツとポーランドの国境付近の、バルト海岸に位置したと言われる伝説の都市。
- 20) André Delaporte, *L'idée d'égalité en France au XVIIIe siècle*, op. cit., p.57-58.
- 21) Voltaire, *Candide ou l'optimisme*, J. Cramer, 1759, p.75.
- 22) Bougainville Louis-Antoine de, *Voyage autour du monde* (1771-1772), Gallimard, 1982, p.263.
- 23) *Ibid.*, p.235.
- 24) *Ibid.*, p.252.
- 25) *Ibid.*, p.235.
- 26) *Ibid.*, p.235-236.
- 27) *Ibid.*, p.267.
- 28) Cf. 鷲見洋一「デイドロの『ラ・カルリエール夫人』を読む」, 『藝文研究』, 慶應義塾大学藝文学会, 1986年, 147-125頁。
- 29) Diderot Denis, *Supplément au Voyage de Bougainville* (1772), Gallimard, 2002, p.46.
- 30) *Ibid.*, p.40.
- 31) *Ibid.*, p.45. この自然への呼びかけは、非常に興味深い。それまでは、タヒチ人たちとヨーロッパ人たちの習慣の違いや、「文明人」と「未開人」という対立構図が問題であったのだが、ここにおいてデイドロは人の力を越えた暴力的な「自然」の手に問題をゆだねてしまう。
- 32) Delon Michel, « Préface », *Supplément au Voyage de Bougainville*, op. cit., p.17.
- 33) Bougainville Louis-Antoine de, *Voyage autour du monde*, op. cit., p.235.
- 34) Diderot Denis, *Supplément au Voyage de Bougainville*, op. cit., p.57. « Sa [=la nature] volonté éternelle est que le bien soit préféré au mal et le bien général au bien particulier. »
- 35) Rousseau Jean-Jacques, *Du contrat social* (1762), Garnier-Flammarion, 1966, p.66. « Celle-ci [la volonté de tous] ne regarde qu'à l'intérêt commun, l'autre [=la volonté générale] regarde à l'intérêt privé, et n'est qu'une somme de volontés particulières. »
- 36) 中川久定「解説」『世界周航記 - 2 ブーガンヴィル航海記補遺』, 岩波書店, 2007年, 220頁。
- 37) Diderot Denis, *Supplément au Voyage de Bougainville*, op. cit., p.78.
- 38) *Encyclopedie ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers*, Tome VIII (1766), Briasson, David l'aîné, Le Breton, Durand, p.278.
- 39) モンテスキューは『法の精神』の中で、「種の繁殖」や「人口減少の回復策と土地の配分」に言及しており、人口を維持することが当時の重要な課題であったことをうかがわせる。
- 40) Kämpfer Engelbert, *Histoire naturelle, civile et ecclésiastique de l'Empire du Japon*, traduite en français sur la version anglaise de Jean-Gaspar Scheuchzer, P. Gosse et J. Neaulme (La Haye), 1729, Tome II, p.52.
- 41) *Ibid.*, p.55.
- 42) Montesquieu Charles Louis de Secondat de la Brède et de, *De l'espris des lois* (1748), Édition Stéréotype, Tome I, 1803, p.95.
- 43) *Ibid.*, p.203.
- 44) *Idem.*
- 45) *Ibid.*, p.203.
- 46) *Ibid.*, p.206.
- 47) *Ibid.*, p.205.
- 48) Démeunier Jean-Nicolas, *L'esprit des usages et des coutumes des différents peuples*, 1776, Pissot, p.91.

- 49) *Ibid.*, p.92.
- 50) *Ibid.*, p.191.
- 51) ミシェル・ドゥロン「東洋の残酷さについて」『十八世紀における他者のイメージ』, 河合文化教育研究所, 2006年, 40頁。
- 52) Dèmeunier Jean-Nicolas, *L'esprit des usages et des coutumes des différents peuples*, *op.cit.*, p.180.
- 53) *Ibid.*, p.182.
- 54) アフリカの王国の1つであると考えられるが, 場所は不明。マルキ・ド・サドの『アリーヌとヴァルクール』(後述)にも, ヨーロッパの風習とは相いれない文化を持つジュイダ王国への言及が見られる。Cf. Sade, *Aline et Valcour*; *Œuvres I*, Gallimard, Bib de la Pléiade, 1990, p.586.
- 55) カール・フォン・リンネ(1707～1778), スウェーデンの博物・植物学者。「分類学の父」と称された。
- 56) 「未開人」の例として挙げられるヘッセンの狼少年や, リトアニアの熊少年, ハノーヴァの少年, ピレネーの子供たちは, いずれもルソーがその3年後に『人間不平等起原説』の中で「カライブ人」と並べて言及するものである。
- 57) Linné Carl von, *Système de la nature* (1758), Lemaire, 1793, p.32.
- 58) *Ibid.*, p.33.
- 59) Montesquieu Charles Louis de Secondat de la Brède et de, *De l'esprit des lois*, tome II, *op. cit.*, p.68.
- 60) *Ibid.*, p.72.
- 61) 時を下って, やがてアレクシ・ド・トクヴィルの『アメリカのデモクラシー』は, 近代民主主義国家のモデルたるアメリカの平等主義が, いかにも有色人種を排除しているかを教えてくれることになる。トクヴィルは, 人種間の不平等はアメリカの問題であり, デモクラシーの問題ではないと強調し, この問題を注意深く避けようとする。彼によれば, すぐれて「人間」である白人が, 生まれた時から隷属状態におかれている黒人と, 誇り高い自由人であるインディアンを打ち従えている。Cf. Tocqueville Alexis-Charles-Henri Clérel de, *De la Démocratie en Amérique* (1835), GF Flammarion, 1981, Deuxième partie, Chapitre X. トクヴィル『アメリカのデモクラシー』, 第2部第10章, 岩波文庫, 2005年。
- 62) 例えば, マルキ・ド・サドは, アフリカやアジアの残酷な慣習を混同させ, デムニエを初めとする思想家たちの文章に更に手を加えて, 時系列や文脈を無視して小説に取り込む。彼はいわゆる啓蒙思想家たちとは異なり, 人間を取り巻く自然の暴力性(彼の説く「自然」とはルソー的「自然状態」とは異なり, 唯物論的意味において用いられる)に注目し, 異国の風習の残酷さをそれに重ね合わせる。サドが1795年に表した小説『アリーヌとヴァルクール』では, 食人習慣を持つアフリカのビュテュア王国と, タヒチ島の近くに位置するタモエ王国という, 二つの国が描かれる。ビュテュアが食人習慣を持ち, ヨーロッパ的価値観を受け付けられない専制君主国であるのに対し, タモエはルソー的言説を具現化したようなユートピアである。タモエの描写は, 『ブーガンヴィル周航記補遺』のタヒチを彷彿とさせるもので, ヨーロッパ言語を流暢に語る国王と, 子孫繁栄をなにより重要視する価値観の存在が指摘される。一方ビュテュアでは性的欲求は生殖とは切り離して考えられ, 快楽は求められるものの人口減少が著しい国として描かれている。
- 63) エドワード・サイード『オリエンタリズム』, 板垣雄三・杉田英明監修, 今沢紀子訳, 平凡社, 1993年, 129頁。

